

2016 年9月4日 主日礼拝説教(要旨)

聖書：ルカによる福音書15 章1～10 節

説教：「天の喜びが見えるか」 日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ルカによる福音書 15 章には同じテーマをもった大小三つのたとえがあります。一匹の見失った羊のたとえ、一枚の無くした銀貨のたとえ、そして放蕩息子のたとえです。これらの有名なたとえは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだしたファリサイ派の人々や律法学者に向けて語られたものです。

先の 14 章において、主イエスはファリサイ派のある議員の家に招かれた食事の席で、「婚礼のたとえ」や「大宴会のたとえ」を語られました。それらのたとえでは救いにあずかる人とは誰かということが語られていました。すなわち、救いは神の恵みによる一方的な招きであって、人間の思いやこの世の常識を覆すような仕方と与えられるのです。主イエス・キリストはそのような神の救いを宣べ伝え、その結果、自分たちこそ救いにあずかると考えていた人たちは主イエスにつまずき、彼らが軽蔑していた徴税人や罪人たちが主イエスのもとに集まって来ていたのです。ファリサイ派の人々や律法学者たちは、主イエスの振舞いに自分たちのプライドまで傷つけられたように感じていたのかもしれない。そんな彼らに対して、主イエスはたとえをもって神の思いを伝えられるのです。

最初の「見失った羊のたとえ」は、「百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を捜し回らないだろうか」というのです。誰でもそうするだろう、と主イエスは言われる。ここで、野原に残される九十九匹はどうなるのかということにこだわってはなりません。仲間の羊飼いに見張りをお願いして捜しに行くに違いないからです。たとえの焦点は、見失った一匹が見つかるまでどこまでも捜し回るということです。

九十九匹にこだわる必要がないことは、並行して語られる「無くした銀貨のたとえ」から考えても明らかです。女性はどこかに落としてしまったドラクメ銀貨一枚を、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜すのです。ここでは手元に残っている九枚の銀貨のことは何ら心配の対象ではありません。どちらのたとえでも、登場人物の心はひたすら見失った自分の羊、無くした銀貨に向かっています。それが自分にとってかけがえのない大事なものだからです。

自分の大切なものを失いたくない、何としても見つけ出したい、その気持ちこそ神さまの思いです。神はご自分のものである私たち人間が、本来あるべき場所から離れ、失われていくのを放ってはおかれませぬ。神は私たち一人一人を大切にしてくださり、ご自分のもとに取り戻そうとしてくださいませぬ。神はそのためにご自分の独り子イエス・キリストをこの世に遣わされたのでした。御子イエス・キリストは、迷子になってしま

っている私たちを捜し出し、見つけ出し、連れ帰るまことの羊飼いとて、十字架に至る生涯を歩んでくださったのです。

ところで、これら並行する二つのたとえは、罪人の悔い改めに関するたとえなのですが、どちらもほぼ同じ言葉で締めくくられています。「このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」(7 節)、「このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」(10 節)。たとえ話とその結論部が「このように」という言い方でつながれているのです。

しかし、「このように」とは何と何が同じなのでしょう。悔い改める一人の罪人が、迷子の羊や無くした銀貨にあたるのでしょうか。考えて見れば、迷子の羊は自分であちこち苦勞して羊飼いのところに帰ってきたのではありませんでした。羊飼いが捜しまわって、苦勞してやっと見つけ出し、羊を肩に担いで連れ帰ったのです。また、無くなった銀貨は、銀貨自体は動くことも、声を出すこともないので、持ち主の女性がともし火をつけ家中を捜しまわってやっと見つけたのです。すなわち、悔い改めるといっても、迷子の羊が自力で飼い主のところに戻れず、銀貨が持ち主のところに戻れないように、私たちが悔い改めたといっても、それは自分の力でできたわけではないのです。そもそも私たちは、自分たちが罪人であることも、自分たちが失われていることも気づかずにいたのです。ファリサイ派の人たちや律法学者が、自分たちは徴税人や罪人とは違って当然神の国にあずかれると思いがっていたように、私たちは罪と死の淵にあることをなかなか認めようとしません。けれども、神はそのような私たちを滅びの中から救い出そうとして、尋ね求めて来てくださいました。神が私たちを捜し、神が私たちを尋ね、神が私たちを捕えてくださるから、私たちは初めて神のもとに立ち帰ることができたのです。悔い改めるとは、この神の先立つ一方的な捜査に気づくことにほかなりません。

では、どうして「このように」と言われているのでしょうか。何と何が結びつけられているのでしょうか。それは、そのときそこにある大いなる神の喜び、天にある喜びです。迷子の羊を見つけた羊飼いや、無くした銀貨を見つけた女の人や、友達や近所の人々を呼び集めて、一緒に喜んでくださいと言ひ、喜びを分かち合っています。神も、私たちが悔い改めて救いにあずかる時の大きな喜びを多くの人々と分かち合おうとされるのです。この神ご自身の喜びに気づき、それにあずかり、それを共に祝うことが私たちの信仰です。主イエスは、不平をもらすファリサイ派の人々や律法学者たちに、あなたがたはこのように天の喜びが分かるかと問われたのです。そして、私たちにも、あなたがたはこのように天の喜びが見えているかと問うておられるのです。